

ステージにはプロのオーケストラと合唱団。4人のソリストもいる。いよいよベートーベンの交響曲第九番（合唱付き）が始まる。舞台の右側に白い手袋をした子どもたちのグループ、左側には別の子供たちのグループが立っている。

第四楽章が始まり、シラー作詞の『歓びの歌』がバリトンのソロで、次いで合唱で始まったとき、思わぬことが起きた。

舞台右側の子どもたちが、ソロや合唱に合わせて白い手袋で手話のような動きを始めたのだ。よく観ると左側の子どもたちも声を出して歌っている。第四楽章は彼らの白熱の「演奏」よりの劇的なフィナーレを迎えた。万雷の拍手。

これは都内のホールで開催された「ホワイト・ハンドコーラスNIPPON」による

第九演奏会だ。白手袋をしているのは聴覚障害をもった子供たちで、点字や手話で覚えた第九の歌詞を手話で歌ったのだ。左側の子供たちは視覚障がい者で、繰り返して聴いて歌詞を覚え、見事に歌った。

耳や目に障害をもち、特別支援学校などに通いながら、狭い世界で一生を終えたかも知れない子どもたちが、舞台上でプロの演奏家たちと「第九」を歌うという、これまで考えられなかった体験をしたのだ。障がいや自閉症などに悩む子どもたちが、第九を通じて相互に交流し、歌うこと、生きることの素晴らし



さを実感する場となった。それが聴衆の感動を呼んだのだ。

これはベネズエラで生まれた運動の一環として、日本で始まった「ホワイトハンドコーラス」というプログラム。社会が一部の人びとを、障がいゆえに我々と同じことではできないグループ

## 第九のきせき

であると決めつけ、狭い福祉の固定観念に捉われて、彼らが真の生き甲斐を感じる機会を奪って奪ってしまっている可能性に反省を促すものでもある。

第九を歌い終えたときのステージ上の子どもたちの笑顔は誰をも魅了し、涙を誘った。聴覚障がいの子が、自分は手話で第九を「歌っている」と信じて澁刺としているのだ。「歌う」とは耳で聴き、声を出すことだけではないのだ。「読む」のが目だけの行為でないように、これは五感のすべてについて言える。（伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』）

このプロジェクトは写真や音

楽の概念を超えて、これまで置き去りにされた人々をインクルードすることによって新しい芸術表現を生み出す独自の試みだ。来年にはウィーンとボンで写真展や、実際の演奏が行われる段取りが進んでいる。来年はベートーベンが聴覚を失ってから書いた「第九」作曲から200年目、「第九」の日本初演から106年（第一次大戦中のドイツ兵捕虜による演奏）目に当たる。その年に、ベートーベンの本拠地で、障がいをもった日本の子どもたちが、現地のオーケストラと「第九」を共演するとは、夢のような話だ。

民族の間に、国家の間に、富める者と貧しいもの間に、そして健常者と障がい者の間にあるほとんど無意識の内に作られた壁を、大人たちが自分の利益に拘って越えられぬいま、子供たちが「第九」によって乗り越えようとしている。子供たちの訪欧が実現すれば、まさに奇跡だ。

最後に第九の第四楽章に登場するシラーの詩から引用する。

あなたの魔法は、時が厳しく分裂させたものを再び結びつける…すべての人が兄弟になる。

（本プロジェクトについての情報は「第九のきせき」欧州実行委員会 事務局（担当：久保田 visible.freunde@elistemconnect.or.jp）

（近藤文化・外交研究所代表